

ありふれた惑星に住む貴方へ、遠い昔の物語を贈ろう。

この世ではじめて星座を見つけたのは、ひとりの賢い羊飼이었다。

彼は羊たちが眠りについた夜、星空を眺めることが好きだった。

「もし星に手が届けば、ぼくは、きれいなネックレスをつくることにしよう」

その夜、羊飼いは考えていた。恋をしていたのだ。相手は鹿のようにすばしっこく、きらきら光る黒い目の少女だった。彼は恋人のように美しい空を、ほめたたえた。

すると、今までにないことが起こった。突然、教会の鐘が鳴るように空から声が降りてきたのだ。

「羊飼いの少年よ、お前は美しい少女にするように、私たちを賛美してくれた。だから私たちは、お前に物語を贈ることとしよう」

その瞬間。これまででんではばらばらに並んでいたはずの星たちが結ばれ、夜空に様々な動物や、神々の姿が見えるようになった。物語は壮大で、ひと晩中やむことがなかった。

あくる日、彼は空に見た物語を恋人に語ってきかせた。物語は人の耳から耳へと伝わり、いつしか彼は

「星を読む人」と呼ばれるようになった。物語だけでなく、星は色々なことをおしえてくれた。

いつ小麦をまけばいいのか。どうすれば雨は降るか。新しい赤ん坊の誕生は、いつか・・・。

うわさは、王の耳にまで届いた。彼は城に呼ばれ、名高い天文学者としてあがめられるようになった。

王の言いつけのまま星を読むのに忙しく、やがて彼は恋人のことも忘れてしまった。そして、30年が過ぎた。

天文学者は、あの草原に立っていた。夜だった。風が運んでくる草の匂い、羊のいななき、遠くに見える村の灯り・・・。ひさしぶりに心がやすらぎで満たされるのを感じた。

冷たい石の塔から眺めるよりも、この草地から見る空こそが一番美しいと、彼は思った。

そのとき、草を踏む音がした。彼はひとりの羊飼いが灯りを手に近づいてくるのを見とめた。誰だろうか？

やがて彼は、その人影がかつての恋人だと気づく。髪は色あせ、つぎのあたって服に身を包んではいるが、その黒い瞳の奥に、なつかしい光を感じることができた。

「ここに来る前、私はあたらしい星が生まれるのを見た。星に導かれ、私はここに帰ってきた」

かつての羊飼いは、口をひらいた。

「貴方が去ってから、私は羊飼いとなりました。人々に星を読んで聞かせるためではありません。

星の中に、貴方の物語を読むことができたからです」

彼女は美しいやり方で、空へ祈りを捧げた。天文学者は帽子を脱ぎ、恋人の手をとった。

「私は羊飼いに戻ろう。これからは貴女の中にある星が、私を導いてくれるだろうから」

これは、あったかもしれない遠い昔の物語。

私たちは今も変わらず、夜空の星座を辿り、星に想い、愛する人の中に星を探しているのです。

「てがみ座」は、このありふれた惑星に暮らす人々の営みを、ふたつの小さな物語にしました。

これもまた新しい星座の誕生のようなできごとです。

私たちが紡ぎだす言の葉のひとつひとつが星となり、貴方の心に結ばれますように。

生まれくる星への祈りをこめて。2009年6月 てがみ座より。 Write Kingyo Ukon